



国際労働機関 (ILO)

ILO 駐日事務所

>>コラム目次

ILO 駐日事務所メールマガジン ジェンダー担当者コラム

(2011年3月31日付第106号)

◆ ◇ 「国際女性の日 2011」～国連公開シンポジウムから ◆ ◇

3月8日は、国連が定めた「国際女性の日」です。今年は、1910年に最初に「女性の政治的自由と平等のためにたたかう」記念の日とするよう提唱されてから100年が経過した記念すべき年にあたります。毎年この日に、世界各地で記念イベントが開催されています。

東京では、国連公開シンポジウム「女性が地球を元気にする」（駐日国際連合諸機関、朝日新聞社主催）が有楽町朝日ホールで開かれました。会場は、4倍以上の希望者の中から抽選で選ばれた600人の参加者で（女性が90%、年代は20～30代が38%）埋め尽くされました。今年のシンポジウムは、仕事帰りにも参加できるように夜の時間帯に設定され、働く意味や、立ちはだかる壁をどう乗り越えるかなどについて意見を交わしました。

まず、藩基文国連事務総長とミCHEル・バCHEレUN Women事務局長（初代最高責任者、チリの前女性大統領）がビデオレターで挨拶しました。UN Womenとは、国連で今年誕生した新組織で、女性の地位向上に活動してきた国連内の四つの機関が統合され、国連事務次長の直轄機関として設置されたものです。

2010年7月に国連総会で採択されたUN Womenの設置に関する決議は、「ミレニアム開発サミットのフォローアップ」の一つであり、国連の制度や事業が一層効率性、透明性を高めながらジェンダー平等を支援強化していくことが期待されています。



東京でのシンポジウムは、第一部のグローバル・トーク「私の職場は地球～世界へ出てみよう～」と、第二部のドリーム・トーク「夢をかなえる一宇宙へ、家族とともに」の二部構成で開催されました。第一部では、人や社会・自然に配慮したエシカル・ジュエリー事業を立ち上げた

白木夏子さん、2002年に中国で仲間とともに飲料水生産会社を起業し現在総経理を務める熨斗麻起子さん、国際的コンサルティング会社の東京シニア・パートナーである津坂美樹さんの3人のパネリストが、「どのような経緯で海外との結びつきを得たのか」「壁を突破するには」などをテーマに話し、聴衆は経験に裏付けられたトークに聞き入りました。

白木さんの場合は、10年前の南インドにおける最貧層の人たちとの生活を通して、「貧困をなくすために自分が何をできるのか」を考えた末、石、貝殻、羽、牛の角などを使ったエシカル・ジュエリー(倫理的に正しい宝飾品)の制作・販売に行き着きました。加工工場で働く20歳前後の若い職人は元ストリートチルドレンです。男社会の日本企業で、子供を持つ女性が申し訳なさそうに辛そうに働いている姿を見て、「女性がもっと働きやすい環境の中でストレスを感じさせない会社作り」を目指し自分で会社を作ったといいます。ルワンダ、ベリーズ、ミクロネシアなどの現地パートナーと共同で事業を進め、二年目で早くも黒字に転換。その姿は、行動力、独創性・ひらめき、持続力・忍耐力に溢れ、自分を表現しつつビジネスで社会に貢献しようと挑戦する気概に満ちています。

一方、日本語教師志望だった熨斗さんの場合は、大学卒業後中国に渡り日系メーカーに就職後、仲間と共同経営で飲料水生産会社を立ち上げました。中国では男女の差より、日本人であるか中国人であるか、できるかできないか、ということ意識したそうです。初代社長は男性でしたが、女性社長として引き継いでからも特に問題はなかったそうです。必要なことは、女性が力を発揮していることを経営者に認識してもらうように努めること、そして女性は自身の考えを貫いて理想に向けて行動することだ、と述べています。

次に、消費財、小売、ハイテク・メディア業界を中心にコンサルティングを担当している津坂さんは、12,000人の女性を対象に行ったインタビュー結果を紹介しました。女性に関して特筆すべきことは、1)時間がない、2)金融商品、自動車など消費の65%は女性の意見が反映されている、3)日本では、パートナーの家事支援を含め、家庭に対するインフラが未発達なため女性が一層頑張ってしまう傾向があることを指摘しました。日本に対するジェンダーギャップ指数(Gender Gap Index:GGI 134カ国中94位)や、女性の就業率が25年で10%しか上昇していない事実の背景を経営者はどう見るべきか、そして女性が働きやすいサポート体制への環境整備こそが鍵であることを強調しました。

総合司会を務めた国連広報センター(UNIC東京)の山下真理所長は、国連全体での女性の進出ぶりを紹介し、国連としては管理職・PKOなどの政治面・和平交渉の立場に女性を登用する点でまだ遅れているものの、藩基文事務総長のもとでは「ポストに女性候補者がいないことは認められない」、という立場を取っている国連における現状を報告しました。



第二部はドリーム・トークでした。宇宙飛行士の山崎直子さん、それを支えた夫の山崎大地さんをゲストに迎えました。宇宙飛行士として妻として母としての直子さん、応援団である夫の大地さん。宇宙という壮大な夢に挑んだ家族は、どのように壁を乗り越ったのでしょうか。ミッション・スペシャリストとしての任務を終え約一年が経った今、その歩みと葛藤を御夫妻に語っていただきました。

現在、直子さんは大学で航空宇宙工学に関する研究を継続しています。宇宙飛行士という職業を選択したものの、「家庭を築き、子供を育てることになるだろう」、ということは面接時に聞かれた時から意識していたと言います。NASAでは職業と家庭を両立している人もいましたし、基礎訓練が終了すれば座学も多いことから、中学生時代からの飛行士になるという夢は実現可能だと思っていたのでしょうか。2001年、宇宙飛行士として正式に認定を受けたもの、国際宇宙ステーションの完成は予定が延び、いつ宇宙に飛び立てるのかは分からない状況に陥る中で、出産も決意します。

他方、筑波宇宙センターで管制官として勤務していた夫の大地さんは、2000年に直子さんと結婚。長女誕生後も夫婦で育児休暇を取得後、父子家庭の中で仕事と家庭・育児・介護の両立に大奮闘。その時の心境を、「不満を言えず主婦の中にも入っていかず、相談相手もいないため共感してもらえない辛さ」を痛感したと言います。精神的に頼る人がいない中、フルタイムの仕事を乗り越えられたのは、同僚の理解と就業時間を完全フレックス制にしてもらった支援があったからだそうです。両親の介護を親族とヘルパーたちとの協力に対応し、職場と実家の片道3時間を往復しました。そのような状況で、電話の呼び出し音にも恐怖を感じたようです。飛行士としてキャリアアップし続ける妻を見守りつつ、個人の意思ではどうにもならない自らのキャリアのスローダウン、また夫として不公平感はずのりします。国家プロジェクトに沿って訓練を重ねる妻と、そのプロジェクトに逆らえない境遇に立たされた自分と、家庭と子供。老親の命。常に極限状態でした。

直子さんは、夫婦間の不均衡は家庭内で解決し、家庭での不満を極力相談することで着地点を見出したかったと言います。しかし、それは国に家庭や弱者に対する姿勢がないと立ち行かなくなります。NASAの命令で動く妻は、訓練から外されると、宇宙へは飛び立てません。夫の不満のはけ口に対する窓口は閉ざされ、それに対し直子さんはひたすら「ごめんなさい。やらせて下さい」と言うしかありませんでした。

直子さんは、ロシアでの7カ月間の訓練を終えた10日後に、アメリカでの訓練が待っていました。NASAには家族支援を担当する部署があり、宇宙に行く人が不利にならぬよう、仕事に専念できるように支援する窓口があり家族ケアを行っています。3日に一回はメールが来たり、説明会や病院体制も整い責任を持って飛行士及びその家族を支えるサポートは進んでいるそうです。

その後、大地さんも娘を連れて渡米しました。しかし米国では、就業許可が得られず、会社を退職して専業主夫の道を選んだのです。子供は保育園、親戚や友人もおらず孤独感から「何をやっているんだろう」と悩みは深まるばかりでした。しかし、日本に帰国して別居状態になることは避けようと思いました。もしそうなれば、家族はバラバラとなり互いの苦勞が目に見えなくなってしまうと感じ、家族で一緒にいることを選択したのです。

結局、制度上大地さんに就業許可は下りず、夫婦間の亀裂は大きくなりました。どうすれば、こんなに追い詰められずに済んだのでしょうか。

会社や組織には、個人ではどうしようもないことがあります。この時、「家庭の安定あってこそ、人のための仕事ができる」という思考を持つべきだと山崎さんは指摘します。「仕事第一」とする考えだけで

は、夫婦共働きが増える今後は、会社と家庭との間に常に壁を作ってしまうと指摘します。

大地さんは、勤務先の会社で育児休暇を取得した第一号だったそうです。現在も取得する人はいますが、残念なのは、その間の評価で差が付くこと。「何でそうなるのか」と悩んだそうです。家族に協力しても、会社で先例を作っても制約があります。自分が選んだのだから覚悟の上だろう、と言われれば、その逃げ道を「死」か「離婚」を求める発想にまで追い詰められたと言います。

そのような時、離婚調停という形で裁判所にて何時間も話しあう場を持ったそうです。相互の立場の相違を解ってはいても、ストレスはより攻撃的となり、双方が板挟みになって行きます。そして裁判所で離婚調停を受けることとしたのです。間隔を置いて考える数カ月があったものの、最終的には自分たちで答えを模索するしかありませんでした。相談して解決できる問題でないことは分かっていました。しかし、自分の思いを聞いてもらい、公平な話し合いの機会を持つ場や制度は是非必要だと言います。

宇宙へ飛び立てることが判った時、大地さんはすでに疲れきっていました。さらに、飛び立つまでには、まだ一年半残されていました。でもゴールは視界に入ってきたのです。そんな中でも、矛盾は自分の中で増幅し、納得感は得られなかったそうです。海、山、寺、神社、教会を訪れたのもこのころです。打ち上げが決まった時には、「もう待たなくていいんだ」という思いの方が先だったと言います。

家族、会社、両親、友人、あらゆる支えがなければ今日まで来られなかったでしょう。そして制度と政策の確立を訴えます。現在の日本の社会制度の中では、例えば、女性と同じ遺族年金は男性には無いなど、想定外で改善すべき点は多いのです。また社会の中に、再チャレンジするための温かい土壌が増えてほしいと言います。昨今、育児ができる環境は、女性に対して整いつつあります。しかし、それでは不十分です。おむつ交換所一つ取っても、大地さんが育児をしていた当時は男性トイレには設置されていませんでした。子供が家庭にいる母親と過ごす生活時間帯に合わせた放送番組作り、「やっぱりママがいないとだめねえ」という言葉への反発。今必要なのは、母子であろうと父子であろうと公平に、そして共に価値あるものとして求められる、そういった社会経済政策作りです。

女性か男性の一方が仕事を辞め、子供も我慢するのではなく、双方が仕事と家庭に入り易い環境と意識作りが世界的な潮流として整備されねばなりません。

山崎夫妻の例は、単純に夫婦の役割が逆転した姿ではありません。そこには、「訓練よりも家族の苦労の方が大きかった。これからは他の人の夢をサポートしたい」という直子さんの言葉のように、そして「苦労したことを次の人が歩まないで済むような環境整備をスムーズに整えてあげたい」という大地さんの言葉のように、広い視野に立った働く人のニーズに見合った環境づくりが不可欠です。

会場を埋めた聴衆は、これほどまでに率直にそして赤裸々に語ってくれた御夫妻、特に夫の立場からの話に熱心に聞き入りました。直子さんの活躍が、女性の地位向上に何らかの形で結びつくことは疑いないでしょう。しかし、そこでもっと、構造的な問題として考えなければならないことがあります。女性の側からは、「自分のキャリアを諦めて夫の夢

を支えている女性は沢山いる」という声が圧倒的に多いかも知れません。男性であろうと女性であろうと、どちらかの性とその活動によって、称賛されたり広く報道されたりすることに違和感を持つ人もいでしょう。また、最近は生活と子育ての両立に悩み、経済的苦境に立つシングル・ファーザーが増えています。人それぞれの受け取り方もありましよう。しかし、女性、そして男性も、性別に基づく固定観念を超えて生きてゆくことが重要です。それが女性の地位向上に繋がるのです。山崎さん夫妻は、その一つの突破口を打ち破ったのです。

今回のシンポジウムでは、御夫妻のプライベートな経験を通じて、仕事と家庭の在り方を考えました。宇宙飛行士という目標に向かって、驚嘆すべき努力と強靱な意志、及び家族との死にもの狂いの葛藤を乗り越えて手に入れたものを互いに共有できたことを、我々は真摯に受け止めたいと思います。学んだことは、男女として、夫婦として、人間として、話し合い、理解し合い、自らの生き方を作ってゆく地道な作業が、どれほど互いの尊重と信頼を協力と忍耐と責任と努力を必要とするかということです。そのためには、家族を支える様々なジェンダー中立的な社会政策が、政府、使用者、労働者三者の合意に基づいて策定され、確実に実行されることが急務です。

学んだことの一つの証しとは、「変わる」ことだと言えます。既成の価値観ではなく、それぞれ自分の生き方を作るプロセスが社会との間で軋轢を少なくして進めることができるように、そしてそれを支える社会と家族への政策が多層的に、同時的に、可及的速やかに実現されることを切に期待します。

最終更新日：2011年3月30日 作成者：Y0 責任者：SH

ILO 駐日 事務所

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-70 国連大学本部ビル8階
Tel: +81.3.5467.2701 Fax: +81.3.5467.2700 E-mail: ilo-tokyo@ilotokyo.jp

ILO 駐日事務所 [[トップ](#) | [ホーム](#) | [国際労働機関\(ILO\)とは](#) | [最新情報](#) | [ILOと日本](#) |
| [出版物・資料室](#) | [メールマガジン](#) | [会議・行事予定](#) | [求人情報](#) | [サイトマップ](#)]

International Labour Organization (ILO): [Contact us](#) | [Site map](#) |

[Copyright and Permissions](#) 1996-2010 International Labour Organization (ILO) - [Disclaimer](#)